

アンリ・メショニックにおける翻訳論

—『聖書』の翻訳実践から—

安 永 愛

はじめに

翻訳とは往々にして、論じる前に成されてしまう営みである。なぜということを開くこともなく、必要に駆られて、あるいは状況に導かれるままに、人は翻訳を行う。それゆえ「翻訳論」なるものには、常に屋上屋のような印象が付き纏う。そもそも人間が成す事に関する「論」とは、常にある種の「遅れ」であり、「追認」の一種である。そこに何がしかの「発見」と「考察」が伴っていてこそ意義あるものとなるが、翻訳論に見るべきものはあるだろうか。

翻訳論の系譜としては、原文への忠実と、母国語の自然さと、どちらを取るかにまつわる論争が積み重ねられてきており、その流れを追うことはそれなりに面白い。例えば、フランスにおいて古典主義的規範が強かった時代には「不実な美女」が重んじられ、ロマン主義時代にいたって原文への忠実を謳う「貞淑なる醜女」が尊ばれるようになったという事実、また明治期の急激な近代化・西洋化の時代には、西洋の文物が取り入れられやすいよう、登場人物の名前や舞台までも日本に移した翻訳ならぬ「翻案」や、思い切り日本的な文脈に引き寄せた「豪傑訳」（野崎敏の言による）が流行ったといった事実がある。

しかし、不実な美女か、貞淑な醜女かをめぐるとの問題は、翻訳理論の課題としては、もはや陳腐化してしまっているようにも思われる。翻訳の問題を別の観点から、また広い視野から捉え直した理論に触れたいと考え、筆者のフィールドである仏語圏の文献を探ったところ、アンリ・メショニック Henri Meschonnic の翻訳論に行き当たった。そこで本稿においては、メショニックの翻訳論の概要を紹介するとともに、ことにメショニックの翻訳論の出発点となった彼の聖書の翻訳実践と、そこから得られた理論的成果に焦点を当てて論じていきたい。

1. 翻訳者・詩人・理論家としてのアンリ・メショニック

アンリ・メショニックは、1932年生まれのエダヤ系フランス人¹で、60年代から文芸批評家として頭角を現し、1970年には聖書のフランス語新訳の試み²である『五巻の書』*Les Cinq Rouleaux*を上梓、1972年に『献辞・ことわざ』*Dédicaces proverbes*により詩人としてもデビューし、1973年には、キリスト教的二元論的への痛烈な批判と旧約聖書のテキストの再評価を打ち出した『記号と詩篇』*Le Signe et le Poème*により、思想界の注目を浴びた。その後も、詩人、翻訳者、思想家として精力的に著作を世に問い続け、2009年に惜しまれつつ没している。メショニックは言語学の教員として長年パリ第八大学で教鞭を執り、一貫して読み、書き、訳し、論じ、詩作する人間として生きた。

メショニックの翻訳論は、訳者としての実践、詩人としての実践と相即する形で生み出されてきたものである。この点が、メショニックの翻訳論を独自なものたらしめている。翻訳の問題を、実践の観点からだけではなく理論的な課題としてメショニックがつとに受け止めていたことは、1970年から1978年にかけて上梓された五巻からなる『詩学のために』*Pour la poétique*の第2巻（1973年刊行）が「エクリチュールの考古学、翻訳の詩学」*Epistémologie de l'écriture, Poétique de la traduction*と題されていることから明らかである。『詩学のために』第2巻第2部は、メショニックの聖書翻訳と並行して執筆されたものであり、自らの翻訳理論の提示と、同時代の翻訳理論の批判的検討に充てられている。『詩学のために』第1巻（『詩学批判—詩の認識のために』の邦題で出版されている）の訳者である竹内信夫は、メショニックの『詩学のために』第2巻第2部について、「〈書くこと〉の実践として規定された翻訳はそこで詩と同質の言語行為として把握される³」と評している。

翻訳の問題は、メショニックの晩年に至っても彼の主要テーマであり続けた。メショニックは、1999年には『翻訳の詩学』ならぬ『翻訳することの詩学』*Poétique du traduire*、2007年には『翻訳することの倫理と政治学』*Ethique et politique du traduire*を上梓している。これらは、アカデミズムに広く見られる

¹ この出自は、重い意味を持つ。メショニックはナチズムの猛威をのがれるため、第二次世界大戦中、身を隠しながら生きた。後にメショニックがヘブライ語からフランス語への聖書翻訳に取り組むことになるのも、ユダヤ出自と無縁のことではない。

² 『詩学のために』の第1巻 *Pour la poétique I* が、『詩学批判—詩の認識のために』の邦題で竹内信夫により訳されている（未来社、1982年）。

³ 同書所収「訳者あとがき」215頁。

価値中立的な科学的分析の書とは趣きを異にしており、新たな価値定立の志向に染め上げられた、いわばマニフェストの書としての趣きを呈している。時に断定することも厭わず、逆説をはらんだ独特の畳み掛けるような文体で綴られたこれら晩年の二冊の翻訳論は、翻訳について語ることが極めてクリティカルな営みであり、言語を基盤とする文化の問題を照射する試みとなり得ることを示しているように思われる。以下、詩人・翻訳者の顔を持つアンリ・メシヨニック晩年の翻訳論のエッセンスを素描していくこととしたい。

2. 翻訳の理論と実践

先に述べたとおり、メシヨニックの翻訳論の特色の一つは、翻訳者としての実践に裏づけられていることである。メシヨニックによれば、「理論」は経験の省察的な付随物に他ならない⁴。「理論」は「実践」であるとの主張がメシヨニックの根幹にある。理論と実践の並行性、その相互浸透はメシヨニックの仕事において徹底した形を取っている。1999年に上梓された『翻訳することの詩学』は、メシヨニックの著作の中で最も規模の大きな翻訳論であり、多岐にわたる問題が取り上げられるが、長めの序文を冠した二部構成になっており、第一部は「実践、すなわち理論」、第二部は「理論、すなわち実践」と題されている。それは、スタティックな「翻訳学」に対する批判からなのであろう。「理論と実践は対立する」、「理論家と実践家は対立する」といった翻訳にまつわる固定観念を排することをメシヨニックは本書の目指すところであるとしている⁵。メシヨニックの翻訳論の中に、常にアジテーションに近い響きがあるのは、翻訳という行為について論じること自体が文化的な創造なのだ、あるいはそうであるべきだ、との意思が込められているからに他ならない。

本書の中には、ふんだんに翻訳のテキストが取り上げられ、その特質が論じられている。これは、理論と実践を融合するためではなく、何が問題となっているかの意識—すなわち「理論」と、具体例の特殊性—すなわち「実践」とを、区別するためである⁶。とメシヨニックは述べている。いかなる翻訳の例が検討されているかは、メシヨニックの関心のありかを端的に伝えるものなので、以下にそれらのテキストを列挙しよう。

⁴ Henri Meschonnic, *Poétique du traduire*, Editions Verdier, 1999, p.9

⁵ *Ibid.*, p.23.

⁶ *Ibid.*, p.23.

『聖書』

ホメロス『イーリアス』

孟浩然 「春眠不觉晓」

ダンテ『神曲』の地獄篇Ⅰ

シェークスピア『ハムレット』およびソネット 27、30、71

ゲーテ『ファウスト』

フンボルト『歴史作家の仕事について』

チューホフ『かもめ』

トラークル『若きエリスに』

カフカ『少女』

ハイデッガーにおける *Sprache* の語

イタロ・カルヴィーノの「ある冬の夜、旅行者がもし…」

以上のように、時代的にも地域的にも多岐にわたるテキストが取り上げられており、メシヨニックの視野の広がりが見える。中でも最も多くの紙幅が割かれているのが『聖書』である。まさに『聖書』の翻訳は、メシヨニックにとって最も大きな質量を持つ翻訳実践であった。メシヨニックの翻訳論を通して浮かび上がってくるのは、彼があまたあるテキストの中でも『聖書』を翻訳対象としたことが、理論形成にとって決定的であったという事実である。なぜ決定的であったのかに特に注目しながら、それがもたらした理論の骨子がいかなるものであるかについて、以下に述べていこう。

3. 翻訳の産物としてのヨーロッパという視点

メシヨニックの翻訳論は、無時間的に措定されているものではない。メシヨニックは先行する翻訳の歴史や翻訳論を踏まえながら、二十世紀という時代に自らの翻訳論を位置づけようとしている。メシヨニックによれば、翻訳の理論を考えることは、翻訳の歴史を考えることと不可分なのである⁷。『翻訳することの詩学』の二つの部分に分かれた長い序文の後半部には「翻訳のヨーロッパは、まず翻訳消失のヨーロッパである⁸」との幾分謎めいたタイトルが冠されており、三十頁ほどにわたる序文後半部は、ヨーロッパにおける翻訳の通史とい

⁷ *Ibid.*, p.38.

⁸ *Ibid.*, p.38.

うべきものとなっている。

この序文後半部において「不実な美女」か「忠実な醜女」かをめぐる周知の時代的背景も把握されているが、注目されるべきは、ヨーロッパ世界誕生に遡って翻訳の歴史把握がなされている点である。「ヨーロッパは翻訳から、そして翻訳の中から生まれた⁹」とメシヨニックは断言する。続けてメシヨニックはこのテーゼについて以下のとおり敷衍していく。

ヨーロッパは翻訳なくしては成立しなかった。しかも、翻訳の原典の全き消去によってこそ形成されたのだ。それは、ヨーロッパの基盤的テキスト、すなわち二つの基盤テキストに関わることである。二つの基盤テキストとは、科学と哲学におけるギリシャ語であり、旧約および新約聖書におけるヘブライ語である。ヘブライズムのものである隠蔽の隠蔽という事象は、西欧の政治神学的歴史に一貫して見られる。それはキリスト教文献学的反ユダヤ主義の歴史である¹⁰。

これ以上、説明を付け加えるまでもない、簡潔にして雄大な歴史把握である。ギリシャ語（による科学と哲学）とヘブライ語（による旧約および新約聖書）がヨーロッパ文明の成立において決定的であったというのに、ギリシャ語自体、ヘブライ語自体はヨーロッパの各国語に翻訳されることによって隠蔽され、そのことによってヨーロッパが自立するというこの逆説。メシヨニックは世界の様々な文明について検討¹¹した後、ヨーロッパが優れて「翻訳」に依拠した文明であるとの結論に達し、次のように述べている。

枢要な基盤的テキストが翻訳であり、翻訳としてしか存在しないという意味で、唯一ヨーロッパだけが翻訳の大陸であり、ヨーロッパにおける偉大なる翻訳といえば、まずは聖書の翻訳であった。ギリシャ語の新約聖書自体がすでに翻訳である¹²。

⁹ *Ibid.*, p.38.

¹⁰ *Ibid.*, p.38.

¹¹ メシヨニックは、インド、中国、日本の文化について、文明創始的テキストと当該の言語とに連続性がある文化であるとしている。文明創始的テキストとして挙げられているのは、日本の場合、『古事記』と『日本書紀』である。

¹² *Ibid.*, pp.39-40.

メシヨニックは、聖書のフランス語訳にあたって、ラテン語によるヴルガータ訳からではなく、またギリシャ語訳からでもなく、ヘブライ語原典から訳すのだが、それはおそらく、彼自身のユダヤの出自と上記のごとき歴史観に由来するのであろう。『聖書』のヘブライ語からのフランス語訳の試みは、メシヨニックにとってはヨーロッパ創始の時に遡り、ヨーロッパ文明の問い返しをも含意する試みとしてあったのである。

4. 翻訳の歴史性

前節において、ヨーロッパがまさに翻訳の上に成立した文明であるとのメシヨニックの歴史把握について触れたが、彼はヨーロッパにおける翻訳の歴史性をいかなるものと捉えているのだろうか。メシヨニックは以下のように述べている。

ヨーロッパにおける翻訳は、神的なるもの、聖なるものの歴史、政治神学的歴史、そしてそこから抜け出そうとする戦いの歴史と交錯している。ヨーロッパの翻訳の歴史は政治的な歴史であると共に詩的な歴史である¹³。

このように翻訳の問題を歴史の中で捉えたとき、様々に浮かび上がってくるものがある。翻訳にまつわる広漠たる問題領域が一挙に眼前に開かれる思いのする一節である。神学と政治と詩学のぶつかりあう場として翻訳の歴史を捉えることができるというメシヨニックの認識が述べられている部分であるとともに、そのようなものとして自らの翻訳論を展開しようとの彼の意思表示の表れた部分でもある¹⁴。

さて、翻訳を考える際に誰もが悩まされる「不実な美女か、貞淑な醜女か」という問題は、メシヨニックの歴史観の中では以下のように捉え直されることになる。少々長くなるが、ヨーロッパの翻訳通史というべきものが簡潔に示されている部分なので引用しよう。

西欧において、聖なるもの、そしてその文学的翻訳は、聖なるものにおいて始まった。それは、命名と神の言葉としての言語活動というコンセプトと

¹³ *Ibid.*, p.40.

¹⁴ 認識論的であるとともに行為遂行的であるのがメシヨニックの翻訳論の一貫したトーンであり、そこに文体の独特の熱気がある。

関わっており、そのため、翻訳行為の限界を示す逐語的借用《calque》が生じることとなった。《calque》とは逐語訳であり、独自の解釈学を伴っている。18世紀まではヘブライ語が起源の言葉とされ、ヘブライ語を頂点とする言語のヒエラルキーが生まれ、聖なるものの究極の形は、コーランの場合のように、聖なる言語の限界の侵犯行為、すなわち翻訳行為の禁止ということになった。

中世ヨーロッパにおいては、最も優位な言語は国際語たるラテン語に変わった。世俗の言語は劣位のものとして見なされていた。

中世は逐語訳が優勢であり、『哲学の慰め』の序文において、真実を腐蝕させない唯一の方法を逐語訳に見ていたボエティウスを理論的支柱としていた。なぜなら、当時、翻訳はキリスト教の布教を旨としていたからである。こうした翻訳の歴史の初期段階から今日に至るまで、意味を訳すか、語を訳すかの葛藤が繰り返されてきている。

世俗テキストが優勢になってからは、意味から意味への自由な翻訳の原則が生まれ、マレルブ以降、十七世紀から十八世紀にかけてのヨーロッパでは「不実な美女」が盛んになる。そして、ロマン主義と固有性の重視から、再び字義通りの訳が良しとされるようになる。このように翻訳は変化するのである¹⁵。

このような翻訳の歴史を把握することによって、自らの生きる時代が照射されてくることになる。メショニックは、二十世紀最後の年に上梓した『翻訳することの詩学』において、二十世紀の翻訳というものがどのようなものであるかについて、以下のように述べている。

ようやく二十世紀になり、翻訳者により、またそれぞれの背負う伝統によって程度は異なるものの、ディスクールdiscoursと口語性oralitéという新たな翻訳原則が明確になってきている。もはや言葉を訳すのではなく、テキストを訳すのである¹⁶。

翻訳論の展開を、アクチュアルな創造行為であると考えているメショニック

¹⁵ *Ibid.*, p.42.

¹⁶ *Ibid.*, p.43.

にとって、二十世紀の翻訳の意義の追究が最重要課題であることは言を俟たない。ヨーロッパの翻訳の歴史を大づかみにすることは、二十世紀のアクチュアリティ認識の糧となるのである。翻訳の通史が序文にはめ込まれているメシヨニックの『翻訳することの詩学』には、彼のそのような思考の型が表れている¹⁷。二十世紀の翻訳の特質として触れられている「ディスクール」という用語も、「口誦性」という用語もメシヨニック独自の意味を吹き込まれたキー・コンセプトであり、この解釈は注意を要する。以下に章を改め、上記の用語に注意を払いつつ、メシヨニックの考える「二十世紀の翻訳」とはいかなるものであるか、明らかにしたい。

5. 二十世紀の翻訳の課題

すでに述べたとおり、メシヨニックの翻訳論全体が認識論でありかつマニフェストともいうべき性質を備えているので、メシヨニックにおける「二十世紀の翻訳」とは、彼自身の現状の認識であり、翻訳者であるメシヨニック自身に課される課題の提示でもあると捉えられる。その点を確認した上で、前節に引用した「二十世紀になって明確になってきている翻訳原則」のコンセプトについて触れていきたい。

まず「ディスクール」についてである。メシヨニックによれば、二十世紀の言語思想はラング *langue* からディスクール *discours* への移行という問題として総括される。ラングが2500年の歴史を持つものに対し、ディスクールの概念が生じたのは1930年代と新しく、いまだはかなく不安定な概念である。ディスクールとは、韻律的、リズム的にラングに根ざした主体、その口誦性、身体性を前提とするものである。メシヨニックに言わせれば、「文学とは、ディスクールと口誦性の最大限の実現¹⁸」である。

つまり、「ディスクール」とは、誰が語っているのか、どのような身体が語っているのか、どのような音律で、どのようなリズムで語られ、そして読まれるのか、といった問題を照射する概念としてあるのだと言えよう。二十世紀の翻訳においては、語それ自体の解釈の妥当性、というレベルではなく、語る主体、あるいは読む主体の振る舞いまで視野に収めた翻訳行為というものが要請されてくるのだと解釈されるだろう。このように考えるならば、『翻訳することの詩

¹⁷ 『翻訳することの詩学』の序文には、「「不実なる美女」の精神としての古典主義と新古典主義」、「忠実訳の十九世紀」に続け「翻訳行為演出の二十世紀」の節が設けられている。

¹⁸ *Ibid.*, p.91.

学』の序文において、メショニックが二十世紀の翻訳に冠した一つの惹句「翻訳行為演出」の語のニュアンスが明らかになる。

二十世紀の翻訳において「ディスクール」の概念がクローズアップされてきた背景には、この時代が、優れてコミュニケーションの発達した時代であり¹⁹、アイデンティティと他者性とのインタラクションが密になってきたという事情が関わっている。アイデンティティが他者との出会いにおいて、他者性によって形作られることの実験が蓄積されたのが二十世紀という時代である²⁰。メショニックは、ことに植民地主義の脱構築、またレヴィ＝ブルユールの論理と前論理の相即した人類学の脱構築によって、二十世紀のアイデンティティと他者性の関係性が変容していったものと見ている²¹。

二十世紀に顕著な翻訳原則として挙げられているもうひとつの鍵概念が「口誦性」oralitéである。これは、明らかに主体性、身体性と結びついた概念である。口誦性とは即ち「声に出して読めること」、「声に乗せられること」とパラフレーズすることができる。このコンセプトにも、意味の正確さ、原テキストへの字句的な忠実さ、といったこととは別の基準が示されていると言えよう。そもそもメショニックは、しばしば問題にされる「翻訳の忠実」とは何に対しての「忠実」であるのか、と問い返している²²。語に対してなのか、意味に対してなのか。語り、書く主体に対してなのか？メショニックは、こう答えている。

翻訳における「忠実性」とは、テキストの内的一貫性、口誦性、ディスクールのシステムとしての詩学を前提とする²³

メショニックには、無人称的というより、身体を持つ主体に関わるものとして捉えようとする傾向があるように思われる。翻訳論もそうした思考の延長線上にある。

もう一つ、メショニックが二十世紀の翻訳における重要コンセプトとして挙

¹⁹ メショニックは、1919年に会議通訳が登場したこと、第二次世界大戦後のニュルンベルク裁判において同時通訳が登場したこと、米ソ冷戦の中で、1954年に翻訳機械が登場したことについて触れている。(Ibid., p.62)

²⁰ メショニックは、『翻訳することの詩学』の中で「アイデンティティは他者性によってしかもたらされない」(Ibid., p.77)と述べ、「他者性の訓練としての翻訳の詩学」というコンセプトを提示している。

²¹ Ibid., p.43.

²² Henri Meschonnic, *Ethique et politique du traduire*, Verdier, 2007.

²³ Ibid., p.1.

げているのが「リズム」である。この概念は、翻訳論のみならず、メシヨニックの執筆活動を貫く最重要概念と言ってもよいものである。メシヨニックにとってリズムとは、ディスクールに固有のものであり、「意味」を超えて、ディスクールに固有の性格を与える当のものなのである。リズムには、表現主体の歴史性と身体性が刻まれている²⁴。さらにメシヨニックのこの概念に踏み込んでみよう。

言語においては、意味が最も重要だと思われてきた。そうではないことを、リズムは明かしている。リズムは意味以上のものを与えるのである²⁵。

このようにメシヨニックは言う。リズムとは、言語において、「意味」をもしのご力を持つものであるというのである。メシヨニックは、とりわけヘブライ語からフランス語への聖書の翻訳経験を通じ、この結論に至っている。

聖書とは、リズムによって意味が作られるものであり、これほどにリズムが意味を作る類例は他に見られない²⁶。

聖書は、重要な役割を担う。なぜならリズムによるディスクールの、ユニークな組織化が見られるからである²⁷。

二十世紀の翻訳の条件を考える際の、有力なモデルとなった聖書翻訳とは、メシヨニックにとっていかなるものであったのだろうか。節を改め論じていくこととする。

6. 聖書翻訳をめぐる

メシヨニックは次のように語っている。

クローデルが一貫して聖書をヴェルガータのラテン語でしか読まなかったのは偶然のことではない。優れて詩的な意味で、フランス語の聖書は存在しない

²⁴ こうしたコンセプトは、メシヨニックの初期の詩論である *Pour la poétique I* (Gallimard, 1970) にすでに萌芽が見られ、以降、彼の思想の最も大きな支柱となっていく。

²⁵ *Op. cit.*, Henri Meschonnic, *Poétique du traduire*, p.550.

²⁶ *Ibid.*, p.549.

²⁷ *Ibid.*, p.91.

からである²⁸

メシヨニックは、信仰のあり方からして聖書の重要性が高かったプロテスタント国は、真正なる聖書訳を持っていると見た。すなわちイギリスにおけるキング・ジェームス王欽定訳聖書、そしてルターのドイツ語聖書である。それに対して、カトリック国であるフランスは、本当の意味でのフランス語聖書を持っていないと見た。その思いが、ヘブライ語からのフランス語聖書訳の敢行につながったのである。メシヨニックは、次のように語っている。

おそらく、聖なるものや神にかかわるあらゆる形式は、独特のディスクールを必要とする。おそらく、全てのそうした形式は通常のディスクールや話し言葉とは異なった、またそうしたものから距離をもつ意味表現の方式である。聖書のためには、言葉からシンタックスへと脱ヘブライ化、脱ユダヤ化するような通常のフランス語化ではない翻訳行為、しかも翻訳をエキゾチズムとする直訳調ではなく、ある過剰から他方の言葉へと達し、同じテンションを保つような翻訳行為が、フランス語において見出されなくてはならない。聖書のディスクールは特別である。それは、口誦性のものである。神にかかわるものは、翻訳においてこうした口誦性と不可分である²⁹

以上の引用は、聖書の翻訳の特殊性に言及されている部分であるが、「ある過剰から他方の言葉へと達し、同じテンションを保つような翻訳行為」という言葉に、原語のエネルギーまるごとフランス語に移し替えんとする聖書翻訳者メシヨニックの並々ならぬ意欲が伺えるであろう。メシヨニックは『聖書』の「詩篇」を訳した経験について、「古い絵画の鮮明な色合いを見られるよう表面の埃を取り払う³⁰」という比喻で語っている。このことを考え合わせると、埃を振り古びてしまった「ユダヤ性」や「ヘブライ性」を、エキゾチズムとしてではなく、鮮明なものとして取り戻す、ということがメシヨニックの聖書翻訳のひとつの要諦であったと考えられるのである。

「宗教的なものによって隠されてしまった神々しいものを、意味によって隠

²⁸ *Ibid.*, p.536.

²⁹ *Ibid.*, p.535.

³⁰ *Op. cit.*, Menri Meschonnic, *Ethique et politique du traduire*, p.153.

されてしまったリズムを再び見出すこと³¹」—それが『聖書』『詩篇』の翻訳の挑戦の意義であるとメショニックは述べている。フランス語の聖書翻訳の多くがラテン語訳を基礎にしているわけであるが、ラテン語訳の原典となったギリシャ語テキスト自体、ヘブライ語からギリシャ語に翻訳された際にすでにリズムが喪失され、意味と形式との間の分裂を抱えてしまっていたとメショニックは見ている。そうした中であって、ヘブライ語原典からフランス語聖書訳を作成することが、いかに困難であり、かつ意義あり魅力ある営みと映ったかは想像できよう。

おわりに

以上に、アンリ・メショニックの翻訳論の骨子を素描し、ことにそれがいかに彼の聖書翻訳という営みと相即しているかについて明らかにした。理論はすなわち実践であり、実践はすなわち理論である、と述べるメショニックの翻訳の実践の諸相に立ち入って分析を加えるのは、彼の翻訳論理解にあたっても不可欠の作業であるが、これについては他稿に期したい。

メショニックは、批判理論で知られるホルクハイマーの「伝統的理論は現状のままの社会を維持する」という言葉を引きつつ、「伝統的理論は現状のままの理論を維持してしまう³²」と付言しているが、メショニックの翻訳論は、それ自体が創造であり、作品であり、work in progressの常に開かれた未完のものである。翻訳の問題を考えるにあたって、メショニックの仕事から我々は多くのものを受け取れるように思われる。

³¹ *Ibid.*, p.153.

³² *Poétique du traduire*, p.77.